

## 日本女性のイメージ —マダム・バタフライ現象—

楠 根 重 和

### 第一章 マダム・バタフライ現象

女性というイメージは男性がこしらえ、そのイメージに合わせようとして女性がつくられる、とボーボアール(Beauvoir, Simon de)は言う。女性解放の波が高まってはいるが、全体として見ると、まだボーボアールの言葉はその有効性を失ってはいない。女性は男の期待するイメージに痛々しいまでに自己を順応させている。女性は男性の期待を内面化し、それを自己の理想像にしてしまっている。

自分たちにとって都合の良いイメージを、女性に対して作りだしたいという男たちの衝動は、決して自国の女性だけに向かわない。他国の女性についても手前勝手なイメージをこしらえる。その場合、そのイメージは具体的な証例の積み重ねの結果生まれてくるというよりも、男の幻想の産物であることの方が多い。それを男の悲しい性と笑って済ますには、その病理は余りにも深すぎる。

どの国にも、近隣の国の女性についてある種のイメージ、固定観念が存在するであろう。このような異国の女性についてのイメージの中で、特筆すべき現象がある。それは日本女性にまつわるイメージである。それも近隣諸国の日本女性に関するものではなく、遠く離れた欧米のそれである。

筆者はかつてドイツのジャーナリズムにおける日本のイメージを分析したことがある。八十年以上も遡って体系的にドイツの新聞雑誌を読んでいて、意外と思ったことがある。<sup>1)</sup>それは、ドイツのジャーナリズムが息長く、執拗に日本女性について書いていることである。このことは日本の新聞や雑誌、旅行記や研究書が、ドイツ女性やヨーロッパ女性をこれほどまでの情熱を持って取り扱ってはいないので、なおさら奇妙な現象のように思える。先の調査では現在から遡って、1908年までの新聞雑誌を扱った。ひよっとするとそれは、ジャーナリストのセンセーショナルリズムと深く結びついているとお叱りを受けるかも知れない。しかしマスメディアを離れて、江戸時代の宣教師の報告書、明治時代の外交官や学者や旅行者の記述したもの、また俗に日本人論と呼ばれる、現在、書店でところ狭しと並

んでいる多くの書籍にあたって、日本女性に関する関心の深さを指摘することができる。日本女性に関するイメージを異文化理解の一つの病理として分析することは、異文化理解というものが高実は大変な作業があるものであって、国際化とか、インターナショナル・コミュニケーションなどといった口当たりの良いスローガンがほとんど役に立たない世界であることを示す好例になろう。それと同時に各人の中にややもすれば入り込む自国文化中心主義に対する警鐘にもなるものと思われる。真の異文化理解のためには、何世代にもわたる、それも底辺での緻密で根気のいる教育と努力の積み重ねが必要である。

日本女性のイメージといっても様々なイメージの複合体からなっている。ネガティブなイメージもあればポジティブなイメージもある。ネガティブなイメージが悪くてポジティブなイメージが良いというようなものでもない。どちらのイメージも相手方の必要に応じて手前勝手に作られたもので、ともに問題をはらんでいるからだ。また日本女性でイメージされるものは、アジアの女性のイメージに普遍化される。アジアの女性の「特性」の代表として日本女性を選ばれることも多い。つい最近のドイツの雑誌シュピーゲル(Der Spiegel)の中で、アジア人の女性と結婚するドイツ人男性が相手に期待している特性として、「美しく、貞節で、働き者で、欲求が高くなく、かいがいしく、ロマンチックで、官能的で、好色」を列挙している(1992年10月5日号)。これらの特性はかつてすべて日本女性について言われたものばかりである。この中にはそれを一つづつ取り出せばポジティブな特性もあるかもしれないが、これらのイメージの複合体そのものを問題としなければならない。この複合体は普通、マダム・バタフライと呼ばれている。このようなイメージがいかに作られたかはこれから見ていくことにすると、とりあえず押さえておかなければならないのは、そこにはエグゾティシズム(異国趣味)とレイシズム(人種差別主義)が横たわっており、しかもそれらははコインの両面であるという点である。このように考えると日本情緒を過大に評価している、日本学者や、「日本通」の書いたものも注意深く読まなければならないだろう。

では次に日本女性がどのように書かれているのか、年代的に見てみることにする。ここに挙げた例はほんの一部の例でしかない。それでも日本女性のイメージが時代と共にどのように変化し、またどんなイメージが時代を越えて生き延びているかを示すには十分だと思う。また、年代は、引用された書物が発行された年であって、実際に書かれた時点ではない。またそれが新聞や雑誌の記事の引用である場合は、それらの新聞や雑誌の発行の年を示している。

## 第二章 日本女性のイメージの歴史

### 中世から江戸末期まで

日本を世界に紹介したのは耶蘇会士であったが、また日本の神話化に寄与したのも耶蘇会士であった。旧教と新教の分裂によってヨーロッパで失った勢力の失地回復を図るべく、全世界に布教活動に乗り出した耶蘇会士たちは、異国の地を理想化する必要があった。自分たちが布教に乗り出したその地が、どれほど布教に値するかを本国に示す必要があった。ちなみに、ザビエル(Xavier, Francisco de)は、書簡の中で日本人を「今までに発見された国民の中で最高であり、日本人より優れている人びとは、異教徒の間では見つけられないでしょう」<sup>2)</sup>と書いている。

実はこのような考え方それ自身が、長い日欧の歴史において「異端的」な考え方である。当時はアジアとヨーロッパの差は余り大きくなかったことも起因している。経済力、軍事力において日本とヨーロッパの間に、多少なりとも差があったとしても、ヨーロッパとの距離を考慮にいれてみると、ほぼ対等であったと考えられる。

日本の神話化のもう一つ別の理由としては、島原の乱が考えられる。島原の乱で多くのキリスト教徒が殉死を遂げたことが、とりわけカトリックの世界で日本を理想化するのに手を貸したのである。ドイツ人が実際に日本に足を踏み入れる前に、ドイツではもうすでに日本に関する書物が70種類も出版されていたことから、この神話化の度合いを窺うことができる。<sup>3)</sup>

このような神話化が、その当時は男女差別の点で、ヨーロッパとは余りかけ離れていなかったはずの日本の女性のイメージに陰を投げかけるのである。

1547年

ザビエルの命令により日本に関する情報を集めていたアルヴァレス(Alvares, Jorge)は次のように書いている。

「もしも女性が怠け者であったり性格が悪い場合には、子供が産まれる前なら、夫は妻を親元に送り返す。もし、もうすでに子供がいる場合は、何か過ちを犯したら、夫は妻を殺すことができ、しかも、一切おとがめなしである。そこで妻は夫の名誉にとっても注意を配り、非常に優れた主婦となる」<sup>4)</sup>。

これはもちろん日本に対する非難ではなくてむしろ驚嘆であると読まなければならない箇所である。

1552年

また先に引用したザビエルの書簡集を読み日本人の優秀性を確信したポステル(Postel, Guillaume)は、当時のヨーロッパの墮落の警鐘として日本を引き合いに出す必要性を感じ

ていた。<sup>5)</sup>

1585年

上の例からも分かるように、日本を理想化するあまり、何でも日本とヨーロッパは違って、それも正反対になっているという思い入れから、逆さのイメージが登場したりする。そのためにフロイス(Frois, Luis)は日本の女性の方が、ヨーロッパ女性より進んでいるとまで書いている。

「ヨーロッパの女性は夫の許しがなければ外出しない。しかし日本女性は夫に報告しないで好きなところに自由に行く」。

「ヨーロッパでは女性が文字を書くなどというのは普通ではない。ところが日本の貴族階級の女性は、それができなければ恥だとみなされる」<sup>6)</sup>。

1586年

同じような日本礼賛はヴァリニャーノ(Valignano, Aessandro)の日本巡察記にも読むことができる。

「人々はいずれも色白く、きわめて礼儀正しい。一般庶民や労働者でも、この社会では驚嘆すべき礼節をもって上品に育てられ、あたかも宮廷の使用人のように見受けられる。この点においては、東洋の他の諸民族のみならず、我等ヨーロッパ人よりも優れている。

国民は有能で、秀でた理解力を有し、子供達は我等の学問や規律をすべてよく学びとり、ヨーロッパの子供達よりもはるかに容易に、かつ短期間に我等の言葉で読み書きすることを覚える。また下層の人々の間にも、我等ヨーロッパ人の間に見受けられる粗暴や無能力ということがなく、一般にみな優れた理解力を有し、上品に育てられ、仕事に熟達している」<sup>7)</sup>

ここには日本人が白人と同じく皮膚が白いことについても言及される。

1616年

これら宗教家が日本について語る時、日本を美化する衝動が彼らにはあった。しかしポルトガルの商人や、オランダ人の商人の場合、そのような必要性がないのは当然で、それと共にこれまでとは違った日本女性像が出てくるのである。

長崎出島に到来する西洋人は配偶者を連れてくることが許されなかった。その代わりに単身赴任の者には現地妻が斡旋されたのである。このことに関してフィレンツェの商人、カルレッティ(Carletti, Francesco)は次のように報告している。

「これらのポルトガル人たちが上陸して居住区に落ち着くやいなや、日本人の仲介男がやってきて女の交渉を始めた。在留期間を通じて、あるいは月割り、日割り、ときには時間割で契約が結ばれ、代金が支払われた。[……]私がポルトガル人たちから聞いたところによると、すべては彼ら側の思いのままに、ごく些少の金額の支出によって決定された。彼らはしばしば三、四スクディの代償に十四歳か十五歳の美しい少女をわがものとし

[…………] 不要になったとき追いつき以外にいかなる責任も負わない。[…………] 極端に言えば、この国は他のいかなる国よりも便利なセックスの充足の利便と、それ以外のあらゆる悪徳のための便宜を提供する。その点で世界のどの国も及ばない」<sup>8)</sup>。

1625年

オーストリアの船長フェルンベルグース(Fernbergers, Christoph Carl von Egenberg)の日記には次のようなことが書かれている。

「彼ら [西洋人] の妻は非常に肌が白く、髪を上品に、かつエロチックに振りかざしていた」<sup>9)</sup>。

1649年

ニュートンも絶賛した地理学者ヴァレニーウス(Varenius, Bernhard)は『日本国についての記述』の中で、日本女性について多くの章を割いている。その中には例えば、女性の結婚と生活の状況、売春制度と不貞、女性の貞節と羞恥心が取り扱われる。またカルレッティのように、日本は男性天国で、時間決めの現地妻を調達できることに言及している。さらに既婚の日本女性については以下のように描写している。

「とりわけ妻は、身分が高かろうと卑しかろうと、特別な可愛らしさ、尊敬、服従によって、夫に気に入られるようにしており、また夫の顔色から、気分を読みとる能力がある」<sup>10)</sup>。

ヴァレニーウスはさらに日本女性が公的な生活から隔離されて、管理下に置かれ、浮気の噂でも立てられたら、死で償わなければならない、女性は男性に奉仕し、子供を生む存在で、政治的なことに口をはさむこと慎まなければならないと、書き続けている。

1658年

インドとセイロンまでは訪れているが、自らは日本には来たことがないブラウンシュヴァイク出身の貴族、マンデルスロ(Mandelslo, Johann Albrecht von)は、他の人が書いた書物に依拠して、東洋の旅行記を書いている。その中で、日本の「妻は正直で、夫に対して貞節である」<sup>11)</sup>と述べている。

1669年

フランシスキ(Francisci, Erasmus)自身も一度も日本に来たことがないが、江戸の初期におけるオランダ人の役割について書いている。その中で、オランダ人が出島に入港するとすぐに同棲相手を世話してくれることを詳しく記している。彼の記述もベルギー人でオランダの商船の料理人見習いをし、後に平戸のオランダ商館の最下級職員となり、後に大使の通訳として江戸の旅行につき従ったカロン(Caron, François)<sup>12)</sup>に基づいている。

「ある人が、それはオランダ人なのだが、街道を旅行していると、昼食であれ、夜にひと休みしたり、食事をとったり、泊まったりしても、絶えず女が、いわゆる女奴隷が待ちかまえている。通訳官はそれから上官に、そこで待ちかまえているいる、美しい絹のスカート [着物のことか] を着た女の中で、だれと一晚を過ごしたいかを尋ねる。この女は実に

快適に役立つものだ。この汚れており、かつ深く根付いている悪習によって、到着するやいなや、船の上官たちはすぐさま、宿の主人や住居を世話をしている者から、いつも側にいてくれる売春婦、あるいは内縁の妻は要らないかと話しかけられる。それじゃ女をよこしてくれと言うと、すぐさま結婚条件が提示される。売春婦には一日3ないし4から6ステューバ[昔のオランダの少額貨幣]、着物代としては20ないし25から30グルデン金貨の値の絹のスカートを一、二枚、それに木綿のスカートを一、二枚、上品で薄い、鹿皮の靴を数足、両親もしくは主人に10、15、ないし30グルデン。オランダ人が食事を一度提供すると、女はその日のうちに彼の花婿になる。彼が出航すると、すぐに日本人の男が現れて、貯めた財産目当てにその女と結婚するのである」<sup>13)</sup>。

1692年

ドイツ人でありながら、オランダの東インド会社に入ったマイステルン(Meistern, George)は大使に同行して江戸に参上した。彼の書いた、東洋全般にわたる著書、『東洋・インドの芸術の園と快樂の園』の中で日本にも触れている。その中で日本女性については、背は低く、色白で、目が細いことに続けて次のように書いている。

「それ以外の点では、彼女たちは非常に親切で、貞節で、言葉少ない。したがって、神と温暖な気候によって造られたそんなにも美しい人々が、異教の地に生きており、またこれが一番残念なことなのだが、偶像崇拜という盲目のうちに死ななければならないことは、残念である」<sup>14)</sup>。

ここでは宣教師の理想化した日本像と、ポルトガル人やオランダ人のもつ女性像が交差している。

1701年

カルレッティの『世界旅行』は死後に発行された。記述の内容は別のところで引用したのと同じであるが、ここではもっと詳しく、しかも男性にとっての「天国」という言葉も見られるので、訳出しておく。またこの著書の中で、日本女性が非常に美しく、皮膚の色がかなり白いことにも言及されている。

「彼ら [娘の斡旋屋] は船員たちの滞在期間中に住んでいる家々を訪ねる。そして処女の娘の体を買う、もしくはもっと気に入る他の形態でそれを手に入れる気はないかと尋ねられる。さらにどれほどの期間、娘を必要とするか尋ねられる。全滞在期間なのか、それとも数晩、それとも数日、それとも数月、それとも数時間。それからその期間にしたがって契約が彼らと結ばれる。[……………]

ポルトガル人の多くはこのような天国で、それもそれほどお金がかからない天国なのであるが、快適な暮らしをしていた。彼らに、処女であるだけでなく、その上とても美人で、それもわずか3ないし4スクードしかかからない、14から15歳の娘が提供されることも希ではない。取り決めた期間中は、彼らは娘たちを自由にできるのである。買い手は娘たち

を約束の期日までにきちんと家へ送り返すことだけを念頭に置いておけばよい。彼女たちはこんな取引をしたからといって、結婚できる可能性がなくなるものではない」<sup>15)</sup>。

1704年

十年間東インド会社に勤務していたフォーゲル(Vogel, Johann Wilhelm)はインドでの対話を基にして旅行記を書いた。その中で、日本女性は夫に絶対の服従を強いられており、夫が妻以外に妾や娼婦を持っていても、一切の口出しができず、また生まれてきた子供が女の子の場合は間引きされることを報告している。<sup>16)</sup>

1747—74年

ライプチヒ大学とゲッティンゲン大学の学者たちが、海外の、とりわけイギリスとフランスの旅行記の翻訳を集めた論集、『水上・陸上旅行の一般史』を長期にわたって出版している。その中で日本を学術的に分析した最初の学者、ケンプアー(Kaempfer, Engelbert)の女性のイメージに対して懐疑が投げかけられる。

「女性に関しては、すべての旅行者から美しいといわれている。ケンプアーは肥前の女性がアジアで一番美しいと考えている。でも彼女たちは背が低いことになっている。しかもその上、化粧をしているから、素顔の美しさがそれほど偉大かは、疑う余地が十分であろう」<sup>17)</sup>。

1762年

耶蘇会の牧師、レナル(Raynal, Guillaume Thomas)の著作は、1783年にドイツから翻訳が出た。ここにも日本に到来と同時に、日本人は客をもてなすために女性を斡旋していることが書かれる。

「[東インド]会社の商人は、彼らの上司よりもいい目をしている。日本独自の客をもてなす作法により、到着すると女が与えられる。その女は出発の日まで手もとにおくことができる。この娘たちは彼らに快樂だけでなく、また金儲けの役に立つ」<sup>18)</sup>。

金儲けに役立つわけは、娘たちが鼈甲の細工ものや、スマトラ製の純度の高い樟脳を持ってくるからだという。

1763年

イギリスの『一般世界史』(An Universal history from the earliest account of time to the present)は1747—1768にかけて出版される。この内25巻がゼムラー(Semler, Johann Salomon)編集によって翻訳される。その中で日本人は多くの徳目を持っているが、悪習がないわけではないと断り、その例として、一夫多妻と売春を挙げている。

「ところで彼らは[日本人]ただ単に一夫多妻だけではなく売春も認めている。彼らのもとでは未婚の若者のためばかりか外国人のための娼婦の館が存在する。[日本人]既婚男性はそこへ通うのを慎まなければならない」<sup>19)</sup>。

1768—69年

スコットランドの詩人で、西インドで船医として勤務していたスモレット(Smollett, Tobias George)はその著『世界の現在の状況』で日本の女性の立場について次のように書いている。

「結婚すると妻は自分の家庭に縛り付けられる。そこからは外に出るのは非常に困難である。一年に一度の例外は、親もとの法事である。男性の顔を見ることは許されない。ごく近い親戚の男性は例外かもしれないが、これもできるだけ控えなければならない。中国でも、また東アジアの他の国でも同様であるが、彼女たちには一切の権限が与えられていない。彼女たちは両親や親戚から夫に買い取られたのである。花婿は、花嫁が結婚式場から自分の家に連れてこられて初めて顔を見るというのがごく普通である。[……]もしも誰か他の男性と話しているところを見られたり、誰かを家の中に入れてたりして、夫に少なくとも嫉妬の感情を湧き起こさせたりしたら、夫は妻に死か、死と同様の罰を与える」<sup>20)</sup>。

1775年

難波してイルクーツクに連れてこられた日本人船員を中心として、日本語学校が設立された。この学校から、最初の露日辞典が出されるのである。たまたまドイツ人でシベリアを探検し、その地に留まっていた時に、日本語を教えている日本人に出会い、彼らから日本に関する情報収集したゲオルギ(Georgi, Gottlieb Johann)は紀行記の中で日本にも言及している。

「どの法律も一夫多妻を禁止していないが、一夫多妻は希である。妾を夫は完全に隠しておかなければならない。なぜなら夫の留守中に正妻が妾にたいして厳しい制裁を加えるからである。女性は中国のように閉じこめられることはなく、自由に外出する。未婚の男性だけが大手を振って公認の遊女街に出入りできる」<sup>21)</sup>。

この内容は先の内容とは矛盾するが、先の記述には日本と他のアジア国々を区別しない見方が現れている。

1777-79年

前述のケンプアーは東インド会社の長崎オランダ商館に勤務のドイツ人医師で、1660年9月24日から1662年10月31日まで日本に滞在し、1716年に死亡した。彼の主著『日本の歴史と記述』は1777-1779年に発表される。死後六十年以上も経ってからである。この二巻ものの大著は日本を学術調査の対象として書かれたこれまでもっとも信頼に足る書物である。このような学問的な取り組み方は、後の時代のジーボルト(Siebold, Philipp Franz)に受け継がれることになる。ケンプアーは日本の地理、政治体制、宗教、民衆、植物学、動物学、医学などを鋭く観察し、学術的な几帳面さで記述している。そのために後世の日本人にとっても、江戸時代を知るための第一級の資料となっている。彼の日本観は非常にポジティブな面とネガティブな面が混然としている。例えば、日本の反キリスト教的な姿勢を高く評価しており、日本の鎖国を南ヨーロッパの支配から守るための手段であると肯



定している。ケンプアーは日本の宗教を分析するのと同じ鋭さで日本の公娼制度を分析する。

「日本の習慣に従えば、寺院からすぐに遊廓に話を移さなければならない。それも寺院よりも後者に訪れる人が少なくはないのである。[……] カスエマツ [傾城町] と、この遊廓は称するが、それはまた、ある丘の名前にちなんで、美しくマリアム [丸山] とも呼ばれている。そしてこの都市 [長崎] の南の部分構成している。[……] この遊廓は町民の住宅の中では最も美しいものであるが、そこには置き屋の旦那の家しかないのである。この遊廓は他の小さなものを除けば、都について日本で一番美人を輩出するといわれる九州で、唯一のものである。

貧しい人は美形の娘が食べて行けるように世話を焼いた。外国人や快樂に溺れる日本人からもらえる食事がとても良いので、この施設はそのような娘で溢れかえっている。そのため都にある遊廓について、ここは全国で一番有名な遊廓とみなされている。

娘たちは幼いときに、わずかの金で一定期間を限って（例えば十年とか、二十年）取り引きされる。そして七人から三十人まで、子供から大人まで、一つの部屋で、置き屋の主人から、その資力に応じて生活の面倒を見てもらう。彼女たちは全員快適な部屋を与えられ、毎日、舞踊、楽器の演奏、手紙の書き方、それにその他の、女性として上品で、かつ贅沢を客に勧める手連手管を学ぶ。彼女たちがこうしたことに巧みになり、チップも増加して、引っ張りだこになり、置き屋の主人に大きな利益をもたらすようになって、彼女たちは上の位に上がり、上客がつき、値段も上がるが、それはすべて主人が懐に入れる。この値段は、二マース [銭のことと思われる] から二イチボ [分] までの間である。ところで後者の値段はお上から決められている上限である。一番下のクラス（もう引退した者や、そうする罰を加えられた者）は、通り客のために一マースの代金で蠟燭の火をつけるために、店の中で寝ずの番をしなければならない。

もしこの遊女が堅気と結婚したら、ごく普通の市民からは、堅気の女性とみなされる。なぜなら彼女にはこのような過ちの責任があるわけではないし、それでいてまともな教育がされているというわけだからである。一方置き屋の主人の方はどんなに富を築いても、決して堅気とはみなされず、また堅気の人と交際することを許されないのである。」<sup>22)</sup>

1842年

この年の『ブリタニカ』第七版には「日本の女の多数が、ヨーロッパ人やその他の外国人と同棲し、売春婦としての手当を受けている」と書いている。このことを著書『誤解』で指摘しているウィルキンソン(Wilkinson, Endymion)は、「おそらく長崎の遊女町の印象を日本全土に拡大適用したための誤認であろう」<sup>24)</sup>と書いている。長崎のオランダ人は出島から外に出ることを許されない。したがって『ブリタニカ』の記述は容易に否定することができる。それはともかく、この文章は当時のヨーロッパの一般的な認識を反映したもの

と思われる。ジーボルトは1823年から1829年まで長崎に滞在し、前にも後にも唯一、例外的に、出島ではなく、長崎に住むことを許された。これは西洋医学の権威としての彼の特権的な立場による。1832年に大著『日本』、1833-51年には『日本動物事典』、1835-70年には『日本植物事典』を現し、また日本の近代医学の発展に尽くした。彼も現地妻を持ち、子供までもうけたが、日本の地図を手に入れようとしたのが発覚して国外追放になった。妻と娘を置き去りにして本国に戻って、しばらくして同国人と結婚している。

### 第三章 日本女性のイメージの歴史

#### 江戸末期から現代まで

江戸の末期に鎖国を解いた日本は、世界に知られることになり、一種の日本ブーム、ジャポニズムが起こる。しかし日本にたいするエキゾチシズム以上には出なかった。その中で、日本女性の長崎の「名声は」、世界全体に広がることになる。

1881年

日本が鎖国を解いて、外国人が数多く訪れることになる。「そのような旅行者の一人—1870年代に世界周遊の途次、日本に立ち寄ったボーボワール伯爵は、男女混浴の『美風』に搏たれ、『日本では、人間は白昼を大手を振って生きている。作法にかなっているかはどうかは、問題にならない。そこには天国の無垢がある。西洋文明に毒される以前の世界だ。日本ではアダムとイブそのままの服装で立ち歩いて、恥じることがない』と感激している」<sup>24)</sup>。

ボーボワール(Beauvoir, Comte de Ludovic)に先立つ一世紀前に、フランスの哲学者ディデロ(Diderot, Denis)はタヒチ島の女性を、フランスの世界探検家ブーゲンヴィル(Bougainville, Louis-Antoine Comte de)はメラネシアの女性を、また今世紀初頭には、フランスの画家ゴーギャン(Gauguin, Paul)がタヒチ島の女性を理想化した。自然で無垢で、文明に毒されていない女性美を高く評価する、エリートの審美観の背後に、相手に羞恥心も性モラルもないとする、ヨーロッパ中心主義の男性観が隠れている。この南洋の理想化と日本の理想化は一脈通じるものがある。

1887年

フランスの海軍仕官ヴィオー(Viaud, Louis-Marie-Julien)は、ペンネームをロチ(Loti, Pierre)という。1885年に練習艦トリオンファント号の艦長として五ヶ月間日本に滞在する。その間に一ヶ月ほど長崎で十八歳の日本娘を金で購い、同棲生活を営む。この体験に基づいて『お菊さん』を書く。これはヨーロッパで空前のベストセラーになる。世界各国に『お菊さん』の二番煎じの作品が生まれることになる。アメリカでは、長崎に滞在した姉の体験をもとに、ロングは『蝶々夫人』(1897年)を発表。『蝶々夫人』はアメリカで大

評判となり、1900年にはニューヨークで舞台化される。そのロンドン公演をみて感激したプッチーニは『マダム・バタフライ』(1904)を作曲したことは余りにも有名である。日本女性の純真な情熱と従順さを讃えているが、都合の良い時の間に合わせ用の日本女性というオリエンタリズムの色濃いこの作品が、なぜヨーロッパやアメリカでかくも受け入れられたか不思議でならない。内容はウィルキンソンの言葉を借用すれば、「植民地的セックス利用小説」<sup>25)</sup>でしかないのに。

1898年

そのような勝手な気分浸っておれるのは、日本女性に無垢な自然性を押しつけているからだ。ドイツの宣教師ムンチンガー(Munzinger, Carl)はその著『ドイツ宣教師の見た明治社会』(die Japaner)の中で、個性の無い「ロボット」のような存在である日本女性と西洋の男性が結婚しても、最初はとても幸せになるかも知れないが、彼女たちは西洋人を感動させるものを持たないので、勧められないと書きながらも、次のように続けて書いている。

「しかしこれだけ欠点があるにせよ、日本女性は好感が持てる人である。その心根は善であるし中にはほとんどどこにも見つからぬほどの愛らしい美しきをした容貌のものもある。私は、次のゲーテの言葉がこれほど合う女性のいる民族を他に知らない」<sup>26)</sup>。

罪の無い無垢な日本女性というテーマはさらに売春との関連で詳しく描写される。

「売春が広範囲に広まっている。東京では一つの大きな区域が、しかも特徴的なことにもっとも美しい区域の一つが、アフロディテの仕事(売春)に捧げられている。そして東京と同様他の全ての町でもそうである。人口五千人しかないような小さな町でさえ売春の家が三軒続いているのを、私は見たことがある。[……]」。

しかし正しく理解するには、この点において日本人が自然児のままであったということである。このためこうした不道徳も、日本ではキリスト教の国と比べて罪の意識がないのである。感情の細かい人でも、この淫行をキリスト教徒の言う悪とは、感じない。これは美的な才能のある人間が良く持っている無邪気さであって、これがこうしたことの評価を決めるのである。[……]ここでは親が娘をこの職業に出すのを滅多に不正と思わず、それどころか娘にそのために注目するのだ。日本の生活のこの点を特に詳しく述べた作家は、これらの少女がヨーロッパの売春婦のように内面的に駄目になっていないこと、この職業が西洋におけるように道徳的人格の根絶という結果を導かないことを、述べている。そして実際にこれらの娘は結婚すると一彼女らの階層の無邪気な判断基準のおかげでこれは難しいことではないが一夫は妻の貞操に信頼を置くことができる」<sup>27)</sup>。

この宣教師とロチの考え方は、同一線上にあることがわかる。

1908年

イギリスの日本研究家ノーマン(Norman, Edgerton Herbert)は、その著『真の日本』で

次のように書いている。

「日本女性こそ、日本の魅力の最たるものである。どんな高貴な女性にも、逆にどんな身分の低い不幸な女性にも、初対面で早くも胸をときめかせ、深く知るにつれていっそう感銘を与える性質、言葉では形容できないなものがある。[……]日本女性の謎の魅力の鍵を解くもの、それは従順である」<sup>28)</sup>。

1913年

この年の8月25日のドイツのフォス新聞(Vossische Zeitung)には『日本における芸者制度と少女売買』という記事が出る。日本の女性や芸者、売春に関する記事は全然珍しくもないのであるが、日本では芸者なしでは政治も行えないとか、日本全体で三百万人も娼婦がいると書かれると、心穏やかには読めないであろう。フォス新聞は当時の第一級の新聞である。

1929年

日本女性の神話化がかくも進めば、「日本女性は世界最良」というレッテルを貼られても不思議には思えないだろう。これはドイツのヴェーザー新聞、11月3日付けの記事、『日本の愛、結婚、離婚』の中の言葉である。

1946年

アメリカの文化人類学者で一度も日本に来たこともなく、もちろん日本語もできないベネディクト(Benedict, Ruth)は、日系アメリカ人と、日本人の捕虜を調査して、今日でもその価値を失わない著作『菊と刀』(The Chrysanthemum and the Sword)を書いた。ここでいう菊とは天皇家の紋章の菊ではなくて、純情で人情に脆い『お菊さん』の菊である。一方、刀の方は説明は要らないであろう。この書物の中にも、日本女性のメンタリティー、芸者、娼婦に関して多くの頁を割いている。

「われわれは性的享楽に関して、日本人のもたない多くのタブーをもっている。それは、われわれは非常に厳格な態度を取るが、日本人はあまりやかましく言わない領域である。日本人は、性は他の『人情』とひとしく、人生において低い位置を占めている限り、一向さしつかえないものと考えている。『人情』には少しも悪いところはない。したがって性の享楽についてとやかくやかましく言う必要は少しもない。彼らは今日もなお、英米人が彼らの大切にしている絵本のあるものを淫猥であると考え、吉原—芸者や娼婦の住む地域—を非常に陰惨な場所のように考える事実を問題にする。日本人は西欧諸国との接触が始まったばかりの時期においても、このような外国人の批評を非常に気にかけ、彼らの習慣を西欧の標準に近づけるために幾多の法律を制定した。しかしながら、どんなに法律で取り締まってみたところで、文化的差異の橋渡しをすることはできなかった」<sup>29)</sup>。

ベネディクトは何頁か先に日本人がいかに異なった考え方をするかの例として、以下のような断定を下している。

「以上のような日本人の『人情』観は、幾つかの重要な帰結をともなう。それは、肉体と精神という二つの力が、各人の生活において覇権を獲得するために、たえず闘っていると考える西欧の哲学を根底からくつがえす。日本人の哲学では、肉は悪ではない。可能な肉の快楽を楽しむことは罪ではない」<sup>30)</sup>。

敗戦の混乱と、夫を戦場で失って食べてゆけない婦女子が巷に氾濫していた。その時に「進駐軍は最高司令部の名で、日本慰安婦を求めた。『新日本女性に告ぐ』と銀座の真ん中に広告された内容は、進駐軍用売春婦であった。[……] 当局は性の防波堤だと激励し、婦人団体もキリスト教徒も、大和撫子の貞操がさんざんもてあそばれるのを黙って見ていた。進駐軍は日本中の娼妓や芸妓などを人道の名のもとに解放したが、その一面パンパンガールという売春婦を誕生させたのであった」<sup>31)</sup>。

アメリカ兵はさぞかし肉体と精神の葛藤で苦しんだことであろう。にもかかわらず、ベネディクトのこの本は、アメリカ兵士に対して免罪符として役だったのではないかと恐れている。それは一つには、アメリカから見ると、罪深く、虐げられ、かつ貧しい女性を買春することで、彼女たちを解放するという側面と、一つには汚れることのない無垢で、いつでも捨てられる便利な女を相手にしているのだから悩む必要はないという側面で。

#### 1952年

キリストと世界紙(Christ und Welt)の5月15日付けの新聞には、『日本一半ばの自由と全くの貧困』とう記事が掲載された。そこにはパンパンガールが7, 8万人もおり、混血児は20万人と推定され、女たちは、西洋を崇拜していると書いている。

#### 1964年

この年は東京オリンピックの年で、日本の紹介記事が数多く書かれるのは当然のこととして、ドイツの大衆紙ビルト(Bild)から、高級雑誌、シュピーゲルまでもが、芸者、売春に関して詳しい記事を載せている。少し例を挙げると、オリンピック特集として、現地の女性を「研究」したビルト紙の特派員が書いた10月15日付けの記事は、『いったい東京の女はどんなのだろうか』という見出しで始まる。

「東京の女はみんな芸者なんだろうか、それとも目下、観光客としてオリンピックに来ている男性の多くを、朝から晩までエスコートするホステスみたいなものであろうか。それとも東京の女は一かつてそうだったといわれているように—「主人」に仕える主婦であり、奴隷であるのか」。

#### 1967年

「栗色の目をした」日本女性は、西洋では許されないセックス奴隷の対象として、今なお存在しているという幻想を抱いて、ビルト紙は執拗に、『マダム・バタフライを追い求めて』、ドイツ人男性のために次のような記事を書いている。日付は4月9日である。

まず、日本にもヨーロッパ男性の食指が動くような容姿端麗で、魅力的な女性が数多く

いると断って、その一例として、ポンド・ガールに抜てきされて、国際的スターになった浜三枝のビキニ姿の写真を載せている。そしてさらに、日本女性の五人のうち、四人までは白人男性に興味を持っていると断定している。ただ、そのうちの二人は「しつけの厳しさ」のゆえにそれを表に出せないでいる。残りの積極的な二人は、白人男性の中でも特にドイツ人を好むのだとしている。そして日本女性の中にマダム・バタフライを見ようとする。

「日本女性の魅力は母性愛、忍耐強さ、謙虚さにある。彼女は男が完全に自分のものである限り、男のために身を捧げる」。

これ以降も日本女性、イコール、マダム・バタフライという固定観念はなくなりはないし、日本女性に対する関心はなくなりはない。しかし、日本の経済が70年代から80年代にかけて欧米を脅かすようになってからは、経済摩擦としての観点から、日本女性をセックスの対象とするよりも、日本女性が社会的に抑圧されていることを、ソーシャルダンピングの一例として見る見方が増えてきている。つまり日本女性も男性と同じ賃金を受取り、国がもっと社会的コストを担えば、つまり欧米と同じ負担を背負い、同じルールで貿易を行えば、日本の経済進出の脅威はなくなるのだと言うわけだ。このような背景から、日本女性についてこれまで言われてきた、ロマンチックなイメージは、非人間的な状態に置かれている女奴隷に取って代わる。日本女性のイメージはいきおいネガティブなものにならざるを得ない。

1978年

この年の3月7日付けの日経新聞によれば、フランスの共産党書記長、マルシェ(Mar-chais, Georges)は日本旅行の後に「日本女性は今なお女奴隷なり」言ったとされる。もっともこの批評は経済摩擦下ではスタンダードな批評の一つである。

1980年

1873年から日本研究に取り組み、東京に本部を置く「東アジアにおける博物及び民族学のドイツ研究所」(Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens), 略してOAGは、これまでに日独文化交流のために多大な寄与を行ってきた。そして研究結果を数多くの書物の形で世に送り出してきた。その中の一つにOAGシリーズがある。その中の現代日本の第一巻では奇しくも日本女性がテーマに取り上げられた。それもずばり『女性』と題した分厚い本の中で、ヘロルト(Herold, Renate)は『経口避妊薬を伴わない愛、日本流の性生活』という論文を寄稿している。その中で、妻は「専業主婦というゲッター」に縛り付けられており、女性一般のセックスは抑圧されていると書いている。それに続けて次のような文章にでくわすことになる。

「日本女性はセックスにほとんど関心がないという私の記述はひょっとして、自らの体験からそんなことはないと判断する、外人男性読者の批判を受けるかも知れない。しかし

その際に考えて頂きたいのは、外人男性は日本では特別な地位を持っており、それゆえ、外人男性に対しては違った反応がなされている点である。とりわけ日本の閉鎖社会で外人と関係をもつことは、治外法権みたいなもので、普通の社会的制裁をしようにも制限を受けている。有色人種に対する優越感、白人種の欧米人にたいする劣等コンプレックスのおかげで、日本女性にとって西洋の男性と関係をもつことは、 Prestige を高めることになる。日本人男性の多くはそのような関係を複雑な眼差しで見ているが、外人のボーイフレンドをもつことは若い女性の間では、シックとみなされている。それは外国映画や、少女コミックの影響と思われる。それはそうと、西洋人男性は、客観的にみて、平均的な日本人男性に比べて、女性を喜ばすマナーをもっており、女性に対して固定的な役割を期待することは少ない。間違いのないことだが、これらは、彼らが日本女性に人気があることのファクターである」<sup>32)</sup>。

もっとも、受け身で、従順で「世界最高の女」というイメージがなくなった訳ではない。

このような出口のない状況から日本女性を連れ出す白馬にまたがった騎士が西洋人というわけだ。自分たちをよりよい恋人と規定する考えから、彼らの頭の片隅にマダム・バタフライのイメージがあることがわかる。

1981年

次に紹介するのは、ドイツの最も高級な週刊新聞、ツァイト紙(Die Zeit)に載った記事で、これは後に単行本になったものである。『日本レポート』と題する本の中でグルーネンベルク(Grunenberg, Nina)は、まず社会福祉行政のレベルの低さについてつぎのように書いている。

「われわれの福祉国家で社会的正義という考え方の中で育った、正直なドイツ人にとって、世界を改革しようとして国を後にし、日本にいくと、状況のひどさのために病気になってしまいそうだ。人間が、そんな状況を改変することなく、受け入れてしまうことがドイツ人には理解できないからである」。

彼女はそれから女性問題に話を移す。

「しかしこれより以上にドイツ人をがっかりさせる問題があるとすれば、それは日本社会における女性の地位である。日本女性がドイツ人の前にひざまずき、挨拶をするために額を床にこすりつけるのを初めて見るやいなや、後遺症として残るほどのショックを感じる。日本人男性がそのことを容認しているばかりか、彼らには道徳的憤りの念が欠如していることで、ドイツ人はなおさらこの状況を見て心が痛むのである」<sup>33)</sup>。

一体どんな日本女性を観察してこんな結論を下しているのか知りたいものである。

#### 第四章 マダム・バタフライ現象の克服のために

私は読者をこれ以上長々と引用文を読ませて苦しめる気はない。このテーマに関する、新聞や書物の引用をもし完ぺきに行ったら、何十巻もの辞書に匹敵する分量を必要とすることだけは確かなことである。もちろんここで引用した著者が、全員まだ生存していたら、私に抗議をするかも知れない。私はそれを実際に体験したのだ。あるいは日本はここに書かれてあるとおりの国なんだと。カナダ生まれのアメリカの言語学者、ハヤカワの著書『思考と行動における言語』のなかのT. E. ヒュームの次の言葉を引用しておこう。

「誰でもよく知っている事実だが、普通の人は事物をありのままに見るのではなく、ある決まった型を見るだけだ」<sup>34)</sup>。

知覚はいかに選択的で、かつ固定観念に影響され易いものであることは今更繰り返すこともあるまい。最初にも述べたように、次々と日本女性に関する記述がなされること自体が病的なものである。東洋の女性は、西洋の男性が、「性差別主義的色眼鏡を通して眺めた」、「男性的な権力幻想によってつくり出された生き物なのである」<sup>35)</sup>とザイド(Said, Edward W.)は著書、『オリエンタリズム』の中に書いている。私はこの主張を肯定できるだけである。私がドイツ人の日本像を研究していた頃に、この書物に出合、ザイドがアラブの世界について書いていることが、日本にも符合することに驚いたものだ。歴史を回顧してきた者にとって、南ドイツ新聞(Süddeutsche Zeitung)の特派員が書いている次のような言葉は受け入れられない。

「ですから、世界中で知れわたっている、日本女性という典型は、服従を何百年にもわたって教え込んできた結果であり、その教育は徳川時代に最高潮に達していました」<sup>36)</sup>。

「日本女性という典型」を作り上げてきたのは、日本の封建主義的男性中心主義にのみ責任があると、この記者は言いたいのかも知れないが、それは自分たちの歴史に対して、無知ということになる。

これまで見てきたことから分かることは、日本女性のイメージそのものが欧米において根絶することにできない偏見の一つになっており、ヨーロッパ人が自分たちの都合で作りに上げたものでしかないということである。ヨーロッパにおいて「フリー」セックスというのは、今世紀の末になって出てきたものであり、一度もまともに機能しなかった。その社会にはその社会のルールがある。いわんや日本においてそのようなものは一度も存在しなかった。自由奔放で、道徳律に縛られることのないセックスが提供される東洋。その代表としての、芸者にイメージされる日本女性、これらは抑圧された性の東洋に対する投影でしかない。日本の社会における女性の地位の向上と共に、かつての日本のマダム・バタフライは、タイ女性やフィリピン女性に姿を変えているのではないかと心配している。「天真



爛漫」で「奉仕する女」とか、「愛の天使」というような言葉を聞くにつけ、私たちは歴史からあまりものを学ばなかったのではないかと恐れている。

最後に二十年以上にもわたって、日本に関するヨーロッパの文献を集め、二巻の書物(Japan in Europa)にまとめたカピッツァー氏(Kapitza, Peter)の労作に敬意を表したいと思う。この論文を書くにあたり、ずいぶんと利用させて頂いた。これは日本像研究の座右の書として、日本研究家にはなくてはならないものとなるであろう。また引用文中の[ ]は筆者が付加したことを示している。

#### 注

- 1) 中埜芳之/楠根重和/アンケ・ヴィーガント：ドイツ人の日本像 三修社 東京 1987
- 2) Xavier, Francisco de: 聖フランシスコ・ザビエル全書簡 S.471 平凡社 東京 1985
- 3) Kreiner, Josef [Hrsg]: Deutschland - Japan, Historische Kontakte S. 23 Bouvier Verlag Bonn 1984
- 4) Alveres, Jorge: The Book of Duarte Barbosa.  
In: Kapitza, Peter: Japan in Europa 1, S. 64 iudicium Verlag München 1990
- 5) 松田/ヨリセン：フロイスの日本覚書 S.45 中公新書 707 東京 1983
- 6) Frois, Luis: Tratado em que se contem muito susinta e abreviadamente algumas contradicões e diferenças de costumes antre a gente de Europa e esta provincia de Japão. In: Japan in Europa 1 S.135
- 7) Valignano, Alessandro: 日本巡察記 S. 5 平凡社 東京 1973
- 8) クーパー, M: 1543-1640年 ヨーロッパ人による日本報告抄  
In: ウィルキンソン, エンディミオン(Wilkinson, Endymion): 誤解 S. 74  
中央公論社 Tokyo 1982
- 9) Fernbergers, Cristoph Carl von: Das Tagebuch der Weltreise Christoph Carl Fernberges von Egenberg  
In: Japan in Europa 1 S. 460ff
- 10) Varenus, Bernhard: Descriptio regni Japoniæ  
In: Japan in Europa 1 S. 574
- 11) Olearium, Adam [Hrsg. v.]: Der hochedelgebornen Johan Albrechts von Mandelslo Morgenländische Reyse=Beschreibung.  
In: Japan in Europa 1 S.612
- 12) Caron, François : Beschrijvinghe van het machtigh Coninckrijk Japan 1645 Amsterdam  
In: Japan in Europa 1 S.680
- 13) Francisci, Erasmus: die lustige Schau=Bühne von allerhand Curiositäten  
In: Japan in Europa 1 S.680
- 14) Meistern, George: Der Orientalisch=Indianische Kunst=und Lust=Gärtner  
In: Japan in Europa 1 S.954
- 15) Carletti, Francesco: Ragionamenti di Francesco Carletti Fiorentino sopra le cose da lui vedute ne' suoi viaggi si dell' Indie Occidentali, e Orientali, como d'altri paesi [...] 1701  
In: Japan in Europa 1 S.269
- 16) Vogel, Johann Wilhelm: Zehen=Jährige Ost=Indianische Reise=Beschreibung  
In: Japan in Europa 2 S.69

- 17) Kästner/Schwabe: Allgemeine Historie der Reisen zu Wasser und zu Lande  
In: Japan in Europa 2 S. 433
- 18) Raynal, Guillaume Thomas: Histoire philosophique et politique des établissements et du commerce des Européens dans les deux Indes  
In: Japan in Europa 2 S.528
- 19) Semler, Johann Salomon: Uebersetzung der Allgemeinen Welthistoire  
In: Japan in Europa 2 S. 537
- 20) Smollett, Tobias George: The present state of all nations  
In: Japan in Europa 2 S.595
- 21) Georgi, Johann Gottlieb: Bemerkungen einer Reise im Rußischen Reich im Jahre 1772  
In: Japan in Europa 2 S.632
- 22) Kaempfer, Engelbert: Geschichte und Beschreibung von Japan, Aus den Originalhandschriften des Verfassers, Hrsg. v. Christian Wilhelm Dohm, Unveränderter Neudruck des 1777-1779 im Verlag der Meyerschen Buchhandlung in Lemgo erschienenen Originalwerks, 2. Band, Brockhaus, Stuttgart 1964 S.9 f
- 23) In: ウィルキンソン, エンディミオン(Wilkinson, Endymion): 誤解 S. 63
- 24) Beauvoir, Comte de Ludovic: Pékin, Yeddo, San Francisco: Voyage autour du Monde. Paris, E. Plon, 1881  
In: ウィルキンソン, エンディミオン(Wilkinson, Endymion): 誤解 S. 69
- 25) In: ウィルキンソン, エンディミオン(Wilkinson, Endymion): 誤解 S. 75
- 26) Munzinger, Carl: 『ドイツ宣教師の見た明治社会』(die Japaner), S. 120 新人物往来社 東京
- 27) Munzinger, Carl: 『ドイツ宣教師の見た明治社会』(die Japaner), S. 122 新人物往来社 東京
- 28) In: ウィルキンソン, エンディミオン(Wilkinson, Endymion): 誤解 S. 77
- 29) Benedict, Ruth: 菊と刀 S. 211f 社会思想社 東京 1967
- 30) Benedict, Ruth: 菊と刀 S. 218 社会思想社 東京 1967
- 31) 宮城栄昌・大井ミノブ編著: 日本女性史 S. 286 吉川弘文館 東京 1972
- 32) Herold, Renate: A. Liebe ohne Pille, Sexualität auf japanisch S.126  
In: Hielscher, Gebhard [Hrsg]: Die Frau, OAG-Reihe Japan modern / Band 1, Erich Schmidt Verlag, Berlin 1980
- 33) Gaul, Richard/Grunenberg, Nina/ Jungblut, Michael: Japan-Report, Wirtschaftsriese Nippon - die sieben Geheimnisse des Erfolgs, S. 26f Wilhelm Goldmann Verlag München 1981
- 34) ハヤカワ, サミュエル イチエ (Hayakawa, Samuel Ichiyé): 『思考と行動における言話』S. 190 岩波書店 東京 1976
- 35) Said, Edward W.: オリエンタリズム(Orientalism) S.213 平凡社 東京 1986
- 36) Hielscher, Gebhard [Hrsg]: Die Frau, OAG-Reihe Japan modern/ Band 1, S. 30 Erich Schmidt Verlag, Berlin 1980